音楽の友 2000/6

ニコライ・トカレフ

東京の演奏会から Concerts Tokyo

オーケストラ

●紀尾井シンフォニエッタ東京

紀尾井シンフォニエッタ第24回定期演奏会は、ベートーヴェン、ブーランク、三善晃の新作の3作で組まれていた。尾高忠明指揮。ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲でのラファエル・オレグのヴァイオリン独奏は、どのフレーズもむらなく伸び、オーケストラもそれに同調するように均質な響きに徹する。しかし、品格ある中にも、自由にはみ出るような箇所や掘り下げもほしい。今回初演となる三善への委嘱作は、室内管弦楽のための「詩鏡（うたがみ）」。タイトルの鏡は、生と死の間にある互いに見えない両面鏡のようなもの、という。半音支配のテクスチュアと全音支配のテクスチュアとが、対照的というよりも連続的な関係にあって、その両者が流入して密度を濃くしても、せめぎ合うことなく融和した響きを発する。生と死の共鳴、という重いテーマに比して、かもし出される響きは饗宴の華やかさを放っていて官能的でさえあるのが印象に残る。

ブーランクの「シンフォニエッタ」は、鋭利なアタックをもつリズミカルなところと、優雅にのびやかに歌われるところとが交替する。楽想の多彩さを際立たせる演奏だった。（4月8日・紀尾井ホール）〈柿崎洋子〉

●東京ニューシティ管弦楽団

これまでオペラ、バレエを中心に活動し、北とぴあ（王子）で年2回の定期演奏会を開いてきた東京ニューシティ管弦楽団が、今春より定期を年5回に増やした。その最初の公演を聴く。《レオノーレ》序曲第3番、イェルク・デームスを迎えての《皇帝》、ブラームスの「交響曲第4番」で、指揮は常任の内藤彰。

弦楽器セクションの一部から細身の響きが紡がれたものの、全体的には新たな門出にふさわしい志気の高い演奏が繰り広げられたといえる。これまでオペラや声楽・合唱曲で力のこもったタクトを披露してきた内藤彰も、奇をてらうことなく、堅実なペース配分を心がけていたようだ。オーケストラも懸命で、ブラームスの第2楽章終盤で感興あふれる楽の音を披露、フィナーレでも緊張感を失うまいという気概を見せた。内藤と東京ニューシティ管はアンコールのハンガリー舞曲第2番でリラックスした燃焼を聴かせ、会場を沸かせている。71歳のデームスによる《皇帝》がコンサートの一つの頂点を築いた。淡々と弾き進んでいくが、決して平板なピアニズムではない。それどころか、音色へのこだわり、そして語り口のうまさが際立つ。古典志向が聴きとれるが、断じてやわな《皇帝》ではなかった。（4月6日・東京芸術劇場）〈奥田佳道〉

ピアノ

●ニコライ・トカレフ

1997年以来、来日を重ねる度に人気が上昇しているというロシアの10代、今は16歳のニコライ・トカレフが今年もまたやってきた。東京でのリサイタルはバッハのシャコンヌ、モーツァルトの「トルコ行進曲」付きソナタ、リストのスペイン狂詩曲、ラフマニノフのソナタ第2番、ボロディン～カミンスキーの「ダッタン人の踊り」などというプログラム。相変わらずに達者なピアノで、ダイナミクスレンジも幅広く、ピアニッシモなどもニュアンスに溢れてすごく魅力的。シャコンヌとかラフマニノフなどにその魅力を発揮していた。けれど、今回のトカレフは前回、前々回などに較べるとすごく低調。モーツァルトは弾き急いでいるという感じだし、またリストのスペイン狂詩曲なども集中力を欠いていた。その演奏姿からはどことなくけだるげな印象も受ける。ほぼ1日置きのスケジュールのその中日ということも原因したのかも知れない。ステージに立つ喜びを感じさせなかった。自己管理が難しい年頃故のスランプというところか。（3月31日・東京オペラシティ・コンサートホール）

●柴田彩子

第2回安川加壽子記念コンクールで第2位に入賞した柴田彩子が、同コンクールを主催した日本ピアノ教育連盟の全国研究大会にてリサイタルに出演した。ラヴェルのソナチネ、鏡、ショパンのソナタ第3番というプログラムである。ラヴェルのソナチネが実に魅力的。この曲に関しては表情的には硬い、乾いた感じの直線的な造形をよく耳にするが、彼女のそれは情感に溢れてなかなかに魅力的である。ピアノの音色が豊かな上に音が美しく、とりわけピアニシモでの様々なニュアンスが演奏に色を添えている。組曲《鏡》での「悲しい鳥たち」とか「洋上の小舟」などでの粒立ちの良い音の連なり、音楽の表情付けなどにもピアニストとしてのセンスの良さを感じさせる。同じ《鏡》の中の「道化師の朝の歌」などは内容的に迫り切れないところも感じたけれど、ハバネラのリズムなどは実に切れ味も良い。ショパンは、良く纏めてはいたけれど、音楽がまだ熟し切れていないという印象もいくぶん残った。第3楽章などのメロディの歌い回しなどがやや切れ切れに感じた。もっと大きくフレーズを纏めて欲しいと、そんな印象も残った。（3月28日・北とぴあ・さくらホール）

●宮坂純子

ハンマーフリューゲル奏者として活躍の著しい宮坂純子の今回のリサイタルは〝ヴィーンの華〟と銘打たれて、ベートーヴェンの「ネル・コール・ピウ」変奏曲、モーツァルトのロンド・イ短調、ハイドンのソナタ第49番、シューベルトのドイツ舞曲作品33、ハイドンのソナタ第52番という内容であった。モダン・ピアノに慣れた耳にはややかそけき音に聴こえるけれど、ニュアンスは濃やかで、演奏的にも良く練れていた。ベートーヴェンは愛らしく、表情豊かだし、モーツァルトの中間部など実にドラマティック。そしてシューベルトはウィーンのホイリゲの気分を感じさせるほどに明るくくったげがない。そしてこの日のハイライトがハイドンのソナタ2曲で、どちらも変ホ長調である。その急速楽章は生き生きと弾んでいたし、また緩徐楽章でのカンタービレな歌い込みも魅力的だ。第49番の緩楽章のメヌエットも洒落ていたし、モダン・ピアノとはまたひと味異なる魅力を彼女はシュタインのコピーで聴かせてくれた。（4月1日・紀尾井ホール）

●鮫島明子

桐朋学園大学、パリ・エコールノルマル音楽院などで研鑽を重ね、ヴィオッティやサン・ソン・ラ・ブルテッシュ国際コンクールに表彰された鮫島明子のリサイタルは、その前半がラヴェルの「水の戯れ」とソナチネ、ドビュッシーの「子供の領分」「夢」「喜びの島」で、後半にはショパンの24の前奏曲を並べていた。くっきりとしたタッチで指さばきも鮮やか、細かい音の連なる急速なパッセージなどなかなかに聴きごたえがある。そうしたなかで特にラヴェルに感じたのが音楽の運びが直線的というのか、ややせっかちに思えた。ドビュッシーなども音の余韻をもう少し味わって欲しい。それに対してショパンは良かった。一曲一曲をよく味わって噛み締めて表現しながら、個々の曲を有機的に関連付けた、ドラマティックな演出はなかなかのもの。（4月5日・東京文化会館小）

●平野実貴

国立音楽大学を卒業後にウィーン国立音楽大学に留学、ピアノと指揮で研鑽を重ね、いまはウィーン・ドナウ・トリオのメンバーとしても活躍している平野実貴が一時帰国、モーツァルトのロンド・イ短調、ショパンの「幻想」ポロネーズ、バラード第3番、シューマンのクライスレリアーナなどをプログラムにリサイタルを開催した。濃やかに色づけしたアーティキュレーションなどが魅力だったし、音楽も表情豊かによく成熟していた。モーツァルトはイ短調特有の愁いを帯びた表情のなかにけっこうドラマティックで多感な演奏を聴かせたし、ショパンやシューマンでも作品への熱い思いが良く伝わってくる。惜しまれたのはやや集中力を欠いたこと。特にシューマンに音のもつれとかミスタッチが目立ってはいたが、内容的には大人の成熟した演奏を味わわせてくれた。（4月7日・カザルスホール）

●水村さおり

東京芸術大学付属高校卒業後にパリ国立音楽院に留学、さらにジュネーヴ国立音楽大学大学院で研鑽を重ね、ジュネーヴやジャン＝フランセ、ブーランク国際コンクールなどで表彰されて、今年春の第4回オルレアン20世紀ピアノ国際コンクールで第1位グランプリに輝いた水村さおりが東京にリサイタル・デビュー。エネスコのプレリュードとフーガ、クルタークの8つの小品、デュティユーの「ル・ジュ・デ・コントロール」、ブーランクのカプリス、ルーセルのソナチネ、ラヴェルの「夜のガスパール」を演奏した。なかなかに切り込みの鋭い、研ぎ澄まされた感性の持ち主で、とりわけ細やかに色づけ